

過去を想起することによる感情コントロール

ー感情コントロールアプリ「PoNeCon」の制作ー

情報メディア学科 大島 直樹ゼミ

1022074

及川 友人

1 はじめに

ティスロンは写真を「行為」として考える写真論を提唱した。撮る行為自体に意味を見出し、それ自体が心的作用をもたらす、言語化できない体験を象徴化させるための「行為」として写真を捉えた[1]。しかし、写真には撮る行為だけでなく見返す行為にも意味を見出すことができる。そこで、感情を変化させるという目的を持って写真を見返すことで、感情をコントロールすることができるのではないかと考え、本研究に着手した。

本研究の目的は、写真を見返すことにより快-不快の次元で感情をコントロールする方法を明らかにすることである。

2 「感情」の定義

感情には情動 (emotion) と呼ばれる強い感情と気分 (mood) と呼ばれる弱い感情の二つに区分される[2]。情動 (emotion) とは「感情の原因や対象が明確である一時的な強い感情」と定義される。対して気分 (mood) はそれらの感情よりもさらにおおまかであり「比較的持続的で、認知の背景にあるような弱い感情」と定義される。そして、それら2つを包括したものを「感情 (affect) 」と呼ぶ。

本研究では「感情 (affect) 」の中のポジティブ-ネガティブ (快-不快) の次元に着眼した。

3 過去の想起と感情の関連性

本研究では「過去を想起することにより想起時の感情が変化する」と仮説を立て、文献調査を行った。調査の結果、気分一致効果・気分不一致効果・感情状態依存効果の3つの項目[3]から限定的な場面以外では過去の想起によって傾いた感情をさらに増幅させていることが明らかにできた。このことから想起する人が意識していない場合、過去の想起によって感情を自由に変化させることはできないと結論づけられた。

4 写真と感情の関連性

被験者に写真を撮影してもらい撮影から12日後に写真を見返してポジティブと感ずるもの、ネガティブと感ずるものの2つの項目にカテゴリ分けをしてもらった。その後、ポジティブ・ネガティブとカテゴリ分けした写真に含まれる感情の要素を8つの基本感情[4]から5段階で評価させた。

被験者は21歳の男性3名、写真の撮影は旭山動物園で行った。

実験の結果、3人ともポジティブにカテゴリ分けした写真には喜びの評価が最も高く、ネガティブにカテゴリ分けした写真には悲しみ・嫌悪の評価が最も高かった。ポジティブにカテゴリ分けされた理由として3人中3人が写りが良い・好きな動物や人物が写ってい

る、ネガティブにカテゴリ分けした写真では3人中2人は写りが悪い、3人中1人が見切れていることを理由として挙げられた。

理想的に撮影できた好きな動物や人物を見返すことが喜びの感情に繋がり、上手く撮影出来ず、見返したくないという感情が悲しみ・嫌悪の感情に表れている。

5 制作物「PoNeCon」

以上の実験から写真を見返して感情をポジティブにコントロールするには喜びの評価、ネガティブにコントロールする場合には悲しみ・嫌悪の評価が大きい写真が適していることがわかった。

そこで、写真を見返すことで感情をコントロールするアプリ「PoNeCon」を制作した。本アプリではポジティブ・ネガティブの一般的認知では語弊が生まれるためポジティブをHot、ネガティブをCoolという言葉に置き換えた。アプリの構造は撮影・編集（図1）・閲覧（図2）とした。



図1 編集画面

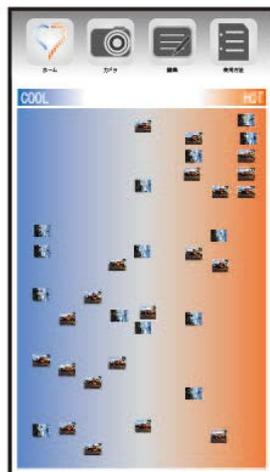


図2 閲覧画面

操作方法は次のとおりである。撮影画面でHotからCoolの9段階に分けて撮影を行う。編集画面では撮影した写真のカテゴリ分けとHotからCoolの段階分けの編集を行う。閲覧画面では撮影したすべての写真が日付昇順でHotからCoolに段階分けしたそのままに表示さ

れる。そこから見たい写真の範囲をフリックし拡大することで写真を閲覧できる。

本制作物である「PoNeCon」は、写真を見返すことで感情をコントロールすることを意識付けるアプリである。

6 制作物の検証・結果

制作物「PoNeCon」を15人に使用させ、有用性を調べた。方法として、検証時の感情と検証後の感情が逆になるように制作物を使用させた。その後、実際に検証時の感情と逆の感情にコントロールできたかアンケートによって検証した。

検証の結果15人中10人が、制作物によって感情をコントロールできたと答えた。

7 まとめ

以上の結果と制作物の検証・結果により、写真を見返すことにより快-不快の次元で感情をコントロールする方法は、まず撮影時の感情状態を記録して写真を撮影させ必要があることがわかった。そして撮影した写真を見返した時に、その写真が撮影者の理想の通りに撮れていればポジティブに、理想とは違う写真であればネガティブにコントロールできることが明らかにできた。

参考文献

- [1] セルジュ・ティスロン, 「明るい部屋の謎-写真と無意識-」, 人文書院, 2001.
- [2] 海保博之・松原望, 「感情と思考の科学事典」, 株式会社朝倉書店, 2010.
- [3] 鈴木直人, 「感情心理学」, 株式会社朝倉書店, 2007.
- [4] 宇津木成介, 基本感情の数について, 国際文化学研究: 神戸大学国際文化学部紀要, 2007.